

御土はんのう

第31号



飯能市有形民俗文化財「山車人形」神武天皇（飯能市教育委員会提供）

目次

- ◆古代高麗郡における仏教の受容……須田 勉 2
- ◆日光山と周辺の見学会……大野邦弘 7
- ◆私が体験した「昭和初期の大恐慌と飯能市街地の経済界」……岩井堂 余談……関根貴志 8
- ◆飯能の丹党武士「青木氏」とその周辺……加藤義雄 2
- ◆随筆 ゴマをよなげる……小沢和子 9
- ◆編集後記……坂口和子 10

古代高麗郡における 仏教の受容

須田 勉

はじめに

高麗郡は、霊龜二年(716)に、駿河以東の7か国に分散していた高麗人1799人を集めて設置された郡で、高麗郷と上総郷の二郷からなる小郡である。この郷には、高麗郡の郡名寺院とされる女影摩寺、高麗氏の氏寺の大寺摩寺、僧勝楽ゆかりの寺とされる高岡庵寺の三か寺が存在する。大化前代から伝統がなく、しかも、わずかに二郷からなる郡に三か寺の寺院が存在することは全国的にも珍しく、ここでは、寺の成立年代や性格について探ってみた。

2 女影摩寺

基礎などの建物跡は発見されていないが、古瓦が集中して出土する高麗郡の女影地区に寺跡が、高麗郡家が高萩駅付近に想定されていることから、高麗郡家に付属する公的性格をもつ寺院と考えられる。そのことは、武蔵国分寺の創建期に高麗郡から貢納された「高」の押印瓦が女影寺からも出土することからも補強することができる。

女影摩寺から、常陸国新治郡の郡名寺院である複弁八葉蓮華文燈瓦と同范の瓦が出土し、新治郡からの搬入品と考えられている(図・1)。一方、8世紀第一四半期に相当する

芦刈場の堂の根遺跡1号住居跡からの出土遺物は、すべて常陸国新治郡跡の特徴をもつ須恵器で占められていた。常陸国から高麗郡に移住した初代の高麗人の住居であったことは間違いない、このことが、新治摩寺の古瓦が搬入されたことや、女影摩寺の創建期瓦が新治摩寺式古瓦の影響を受けて成立したと強く関連を持つと考えられる。(図・4)。

堂の根遺跡は上総郷に所属するので、二郷協力のおかげに女影摩寺の造営が進んだことは明らかである。

3 大寺摩寺

毛呂山丘陵南端部の宿谷川に面したゆるやかな南斜面にある山林寺院である。発掘調査の結果、礎石建物が4棟検出されているが、建物配置にまとまりがなく、南都の寺院にみられるような伽藍配置を持つ寺院ではない。礎石には、構造柱のほか、熊谷市寺内摩寺のように床をもつ建物も存在した。

出土軒先瓦には、単弁四葉蓮華文と平城宮6225A形式を模倣した燈瓦がある(図・6)。特に後者は、恭仁宮大極殿や平城宮第二次朝堂院に使用された主流の瓦である(図・7)。

国分寺など、宮殿の造営や造宮省がかかわった国分寺にかざられるので、一地方寺院から出土するものは極めてまれである。大寺摩寺出土瓦と都との間に接点があるとしたら、背奈福信が高麗朝臣の姓を賜った天平

勝雲二年(750)ごろのことであろう。そう考えた場合、大寺摩寺は、背奈王家一族の氏寺となる可能性が高い。

4 高岡庵寺

中央の5間×4間の四面廂建物の仏堂と二棟の側柱建物などによって構成される山林寺院である。高岡庵寺の造営は、出土遺物の検討から8世紀中頃に始まり、10世紀に廃絶したとされる。創建時期が高麗氏系国にみられる「勝楽寺」の創建年である天平勝雲三年(751)と合致することから、僧勝楽ゆかりの寺と考えられている。建立者は弟子の聖雲であり、聖雲は高麗王若光の第三子とするので、系国からみるかぎり高麗王家系の寺ということになる。この想定が正しいとすると、聖雲の所属する寺院が女影摩寺の可能性もあり、高岡庵寺の立地とも関係して、女影摩寺の山林寺院に発展したと考えることも可能であろう。

おわりに

冒頭でもふれたように、伝統をもたない、わずかに二郷からなる小郡で、三か寺の寺院が存在する郡は珍しい。いずれも8世紀中頃の創建と考えられるが、建郡から30余年を経過し、移住第二世代に至り寺院を建立したことになる。創建期の瓦は蓮弁が六葉の蓮雷文や四葉であった(図・2・3)、中房が乳房状にたなり(図・8)、いずれも高句麗の瓦当文の基本を受けたもので、入間郡の郡名寺

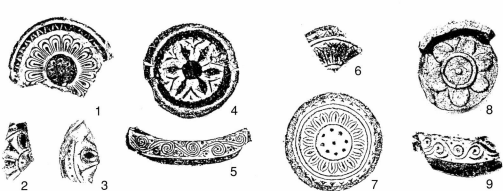


図 高麗郡出土瓦 (1~5 女影摩寺、6 大寺摩寺、7 平城京 6225型式、8・9 高岡庵寺)

(国士館大学教授・会員)

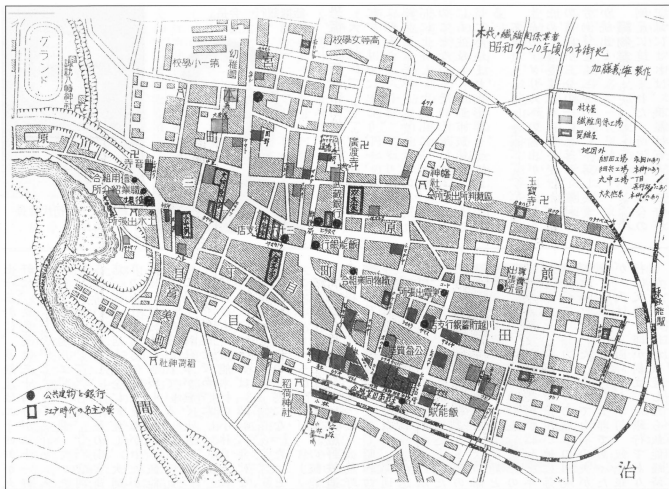
私が体験した
「昭和初期の大恐慌と
飯能市街地の経済界」

加藤義雄

恐慌以前の飯能市街地の経済界

大恐慌が始まる昭和四年以前の飯能は、既に、武蔵野鉄道が、池袋から飯能を経由して吾野まで開通しており、道路も現在と殆んど同様に出て上がつっていた。人家は吾野線の内側のみであったが、市街地の人口は約8200人で、主な道路には、商人と職人の店がびっしりと軒を連ね、生活必需品は凡て市内だけで間に合った。業界の事務所は、織物組合事務所と材木屋の組合事務所があり、金融機関は、飯能銀行、武蔵銀行、三十六銀行支店、川越野蓄銀行支店の四行があった。飯能銀行は、明治三十四年に設立され、初代頭取は名栗の平沼源一郎（凡て敬稱省略）であったが、当時の頭取（会長と云われていた）は、川越の豪商で八十五銀行の頭取であった綾部利右衛門で信用は絶大であった。武蔵銀行は地元原町の佐野作次郎が創立したもので、当時は二代目作次郎が頭取で、信用第一の手堅い銀行であった。三十六銀行は現在の大通り（「J」A元飯能村名主大河原政五郎の分家、大河原岩蔵が支店長であった）。

飯能は昔から材木と織物の町と言



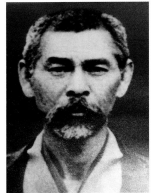
われていたが、当時、飯能市街地周辺の農家は蕎麦が盛んで、市街地は上記の地図でご覧の通り、製糸工場、染色工場、熱系工場、織物工場が多数点在し、織維を取扱う糸商師、買継屋が主要道路に豪華な土蔵造りの店を構え繁昌していた。大正十二年調査の「入間郡工場法通用工場一覽」を見ると、当時、入間郡には通用工場が四十三工場あったがその内飯能の工場は、丸中工場、細田分、尾関、小槻、中里、細田、吉沢、細田、丸美、大原屋、宮岡の十工場の名が出ており、また、染色工場として、河原の丸中工場、熱系工場の欄には飯能駅前的小林工場が記載されていて、当時の盛況振りが窺われる。

材木屋は、明治時代には、市街地には十軒足らずであったが、大正四年の鉄道開通を契機に、若手の材木屋が先を争って駅前に出店したため、当時は三十軒以上に増加し、織物に継ぐ多額の外貨を稼いでいた。このような次第で、昭和初期の飯能は織物と材木の町として栄え、所沢より大きい川越に次ぐ立派な町であったのである。

当時の飯能界隈の有力者は誰かと云えば、私見では、小能五郎、金子忠五郎、新井清平、丸中中里弥三郎一家、平沼伊兵衛の五氏の名が挙げられる。小能家は、江戸時代、苗字帯刀が許された名家で、秩父屋と稱し、薮、生糸、織物で財をなし、「飯能の小能か、小能の飯能か」と言われた。忘れてならぬことは、武蔵野鉄道を開通させ初代社子忠五郎



武蔵野鉄道 重役
金子 忠五郎



武蔵野鉄道 初代社長
小能 五郎

郷土はんのう

は、当時金子家十二代目の当主で、大通りに黒塗りの土蔵造りの店を構え「黒金子」と云われていた。明治十六年の大演習に際しては、行在所となり、明治天皇が二泊されている名門で、小能五郎と共に鉄道開設に盡力し重役に就任した。新井家は江戸時代からの資産家で、当時は穀物の大問屋で大地主であった。九中、中里弥三郎は明治四十四年に大河南から宮本町へ進出し、大正の初めに動力による最新式の織機を入れ鋸屋根の新工場を建てたが、当主の弥三郎は、弟、妹を分家させ九中工場を造らせた。妹たちは染色工場を河原町に、織物工場を一丁目の仲町に造ったが、その後、業容拡大し、大正十三年には一丁目の真行坂に大工場を建設した。平沼伊兵衛は中山の素封家で、明治時代に原町の武蔵銀行の隣に店を構え買値屋として東京をもとより、京阪地方とも手広く売買していた。昭和初期の飯能経済界はこのような人々を中心と動いていたと言っても過言ではない。



飯能銀行 会長
平沼 弥太郎

恐慌下の飯能市街地の経済界

大恐慌が、一九二九年（昭和四年）にアメリカに起こり、一、九三三年（昭和八年）には、アメリカの国民総生産は半減し、失業率は二四・九％に上昇し、大混乱に陥った。当然のことながらその影響は直ちに我国にも波及し、小都市飯能もこの大恐慌に巻き込まれ大影響を受けたのである。

不況はあらゆる業種に及んだが、生糸のアメリカへの輸出が半減したため、養蚕農家が直撃を受けた。前の値段が三分の一に暴落し、農村の労働賃金も三分の一に下落し失業者が続出した。
織物業界も大打撃を受け、廢業、倒産に迫られた。所沢織物組合の記録によれば、機屋は百六十三軒が

七十三軒に、買値屋は二十四軒が九軒に、染色業は三十四軒が二十一軒にそれぞれ激減している。前述の「入間郡工場法通用工場」に載っていた尾関工場、小槻工場、吉沢、丸美、宮岡各工場が姿を消し、買値屋の両宮商店、大森商店も完全に倒産し、大通りの山叶商店も倒産はまぬがれたが窮地に迫られ苦戦した旨が「飯能人物誌」に書かれている。流石の九中工場も一時仕事が無く大変であったと云うが健全であった。
一材木屋も、飯能木材の小林貞治社長の本格的なよれば「昭和八年にならざりばは皆無の状態になった」と書かれている。

それはそれとして、恐慌下の飯能市街地経済界の大問題は武蔵野鉄道の不振と飯能銀行であった。武蔵野鉄道は恐慌前は順調に発展し昭和四年には吾野線を開通させたが、昭和五年に同時大恐慌に見舞われ経営が急激に悪化し、五十円の株価が五円以下に下落し、倒産寸前に迫られた。一方、飯能銀行も恐慌により多額の不良債権を抱え苦境に陥り、大口融資先の武蔵野鉄道の不振が大問題となった。折悪し、時の会長（頭取）

川越の豪商綾部利右衛門が昭和七年一月に病死し、銀行の信用が地に落ちる始末、強力な替りの頭取の出現が急務となった。そこで白羽の矢が立てられたのが平沼弥太郎であったが、氏は再三固辞した挙句、飯能銀行は父源一郎が創立した銀行であり、しかも、銀行が破産したら飯能経済

界に及ぼす影響は計り知れないと考へ、遂に頭取就任を決意した。そして、飯能銀行健全化を断行したのである。当然のことながらその鋒先は武蔵野鉄道に向けられ、個人保証をしていた小能、金子両氏はその失態に立たされることになった。その結果、両氏は多額の私財を投打って返済に当て先祖伝来の財産を大分減らされたのである。誠に残念なことであった。その後も平沼弥太郎は、銀行健全化のため、鉄道の処分を計画し、紆余曲折の末、遂に西武鉄道の塚原次郎への売却に成功した。恐慌は飯能市街地の経済界以上の如き大異変をもたらしたのである。

不況対策と企業努力

大波瀾の中、行政は不況対策に乗り出した。職業紹介所、公益質屋を昭和六年に開設すると共に、公共事業を積極的に開行した。出口通りの整備、本郷・永田の名栗街道の直線拡幅工事、中山道の整備、区画整理、宮沢湖の建設、飯能女学校の新設、小学校校舎の新築、飯能警察の新築を次々といひ、景気浮揚と失業対策に手を打った。

織物業界では組合がまとまり、同盟機構、五割採業短縮等を実施し、また、新製品の研究、開発に取組んだ。木材業界では、時の木材組合長浅見保太郎の指導の下、西川材の評価を高めるため、正量取引の実行、品質管理を徹底的に組合総力で行った。そして、その一方、西川材の宣

伝に力を入れ、西川音頭を作词作曲しレコードに吹き込み、東京方面の問屋に配り、また、西川音頭の踊りを作り、神社の境内、広場で踊りまくる、劇場で西川音頭大会を開き、飯能、東吾野、原市場、吾野、名栗の山林業者が集り、東京方面の客を呼んだ。東京へも進出して、日比谷公園の公会堂で横浜、東京の材木屋を接待し西川音頭を踊り大いに西川村をPRし不況打開に努めた。

昔の材木屋の前向きな企業努力に敬服する次第である。業者の企業努力の行政の不況対策、業者の企業努力の結果、さしもの大恐慌も昭和十年頃から回復に向い克服することが出来たのである。

以上、昭和初期の大恐慌下の飯能市街地の経済界に就いて述べさせて頂いたが、百年に一度の大不況と称せられる平成の不況に呻吟している現在、何等かの参考になれば望外の幸である。(理事)

郷土はんのう

飯能の丹党武士

「青木氏」とその周辺

吉田 靖

……飯能くらい歴史的に豊かな所はない……これは心の隅にいつも息づいている私の誇りです。なにして大名が二家も輩出して江戸時代を飾ったのですから。

職業(記者)が私は長年、各地を転々として来ましたが、どこへ行っても「大名が出た」という市町村は一つもありませんでした。

城一つも無い、いわゆる一寒村に過ぎなかった飯能ですが、そこから中山氏、黒田氏二家も殿様が出たというのですからすこい。この点、おそらく私一人ですく多くの市民の誇りになっているのではないだろうか。

ところがです、その後の調査で中山、黒田のほかにもう一軒、精明青木地区の青木氏から分かれたと伝えられている同族青木氏が関西で大名になっていますがほぼ解明されたのです。二家でも大変なことなのに、実は三家が大名になっていた、これは驚くべきことで、将来、飯能郷土史の一頁を飾ってくれるのではないかと、そんな期待に子供のように胸を躍らせている今日この頃です。

◆皇族系武士団の誕生

大名となった中山・黒田・青木の御三家は武威七党武士団の一、丹党系武士です。源氏や平家軍団同様の皇族系武士団でした。

古代、桓武天皇は皇族たちにそれぞれ「平」や「源」の姓を与えて臣下の籍に下ろし、武士として天下平定に尽くすよう下令しました。これが桓武平氏、清和の嵯峨・村上周縁氏と呼ばれる職業軍団となり、お互い命懸けで覇を競いながら日本全国を平定していききました。武威七党とか

下総(しもとうさ)六党と呼ばれる関東武士団も源・平武士団と同じ皇族系で天皇から姓を与えられ、臣下の籍に下ろされ各地に配置、形成された集団なので。

朝廷がなぜ皇族を臣下の籍に下ろして戦争を職業とするプロ軍団を育成していったのか、それには二つの理由があったとされています。

第一点は皇族が年々鼠算式に増加、経済上過重な負担となっていたこと。第二点は朝廷に歯向かう抵抗勢力撲滅のため各地に大軍団を派遣するが、時に地方の少数軍団に敗北してしまうケースもあり、強力軍団育成の必要があったこと。

このようにして武士階級が生まれ全国に配置されていったわけです。

◆丹党武士の誕生

丹党武士団のルーツについて戦時中に書かれた『飯能郷土史・国民学校編』と昭和六十三年(一九八八)に飯能市が刊行した『飯能市史』には要旨次のように記述されています。

……古代、宣化天皇の孫、十市王子に子が生まれたとき、産湯に多治比(虎杖・いたどり)の花びらが浮いた。そこで天皇はその子に「多治比」の姓を賜った。その子島に姓真人を賜り、その後「多治比」を「丹治」に改めた。島の子懸守は養老三(七一九)七月武蔵守に任じられ、その弟彦足は天平十年(七三八)八月武蔵守となり、その後もこの系は武威とかかわりを持ち、数代後の武信が

姓「丹治」と改めた。孫の峰時は丹貫主(たのかんじゅ)と称した。その後峰時の系は秩父、児玉、入間の各地に分岐、繁栄した。峰時五代の丹基房(飯能丹党の祖)は秩父に住み「秩父」を姓とした。……

そして秩父基房の系は長子・直時から直兼・直時へと続きましたが、これが摂津浅田藩青木氏となっていました。

秩父基房の次男・綱房・実直(真直)との系が武威高麗郡青木村に住し青木氏となりました。(直時・実直の時代、両家は高麗郡青木村に住していたことが予想されます)

◆三家大名へのいきさつ 【中山・黒田氏の場合】

戦国時代末期、豊臣秀吉が小田原の北条征伐を行ったとき、飯能の丹党武士、中山家範(いへのり)は小田原・北条氏の支城八王子城の家老職にあり、豊臣の軍勢である前田利家軍などと戦うことになりました。豊臣軍は一万を超える大軍、片や八王子の北条軍は無益にたつた七百、衆寡敵さず、籠城戦は無益でした。利家から降伏勧告を受けるが、家範は「二君にまみえず、討ち死にした。この話を聞いた家康は「家範には子がおろ」と探し出すよう指示する。家範の長子、助六郎照守(21)と弟菊太郎信吉(17)兄弟は八王子城落城後、残党狩りを恐れ隠れ住んでいたが、敵方、徳川家臣に発見され家康の前に引き出される。そこで家康は兄弟

が父家範似の聡明な男だと直感、近習として側近くに任せさせる。こうして兄・中山照守の子孫は江戸城にあって御旗奉公など高禄旗本となり、四代後の直邦が館林藩の家老、黒田氏の養子となって三万石の上州沼田藩城主となり、直邦二代からは代々上総久留里藩(千葉県津市)の三万石の城主として明治維新まで続きます。初代直邦の墓は天覧山の北西多峰主(とうのす)山中腹にあり、市の文化財に指定されています。以後黒田氏の歴代城主の墓は天覧山麓の名刹能仁寺におかれました。

「なんだ、たった三万石大名か」と思われたかも知れませんが、直邦は江戸城で老中職を勤めるなど江戸幕府内でも重要な役割を果たしています。天覧山の中腹、男坂コースに石仏が点在しています。これは十六羅漢像です。天覧山はその昔、愛宕山と呼ばれていたが、十六羅漢像建立以来「羅漢山」と呼ばれているようになりました。(明治になり天皇陛下が軍隊の演習を見るために来飯、登山されたことから「天覧山」と変わりました)

一方、弟の中山信吉は一万五千石の水戸藩の別格付家老となり、後に松岡地方の二格付老との知行地を得、その後も中山氏は明治維新まで歴代大名格家老として活躍しました。

初代信吉墓は飯能市山の古刹智観寺にあり、埼玉県の文化財に指定されているほか、以後代々の墓も同寺におかれ貴重な郷土の歴史を物語っています。

【青木氏二家の場合】

次が丹党系青木氏の足跡です。青木氏には飯能・青木地区に土着した青木氏と、津・麻田藩の藩主となった青木氏とに分かれ、それぞれが、鎌倉末期から室町初期にかけての両青木氏の足跡がどうもハッキリしない。たとえば高麗郡青木村(精明地区)に住んでいたといわれる浅田藩青木氏(関西へ渡ったのはいつ、どのような事情だったのか……)こうした点が明確ではないのか……丹党系因や青木氏の家譜からみると、秩父基房の数代後、戦乱続きの鎌倉末期から室町にかけての直兼、実直の時代、主家の命により関西方面で戦いに加わり、そのまま摂津国に住み着いたのではないかと思われまふ。

一方、現在の飯能・青木氏の場合、土着してしまつたため、当時の資料はほとんど無く、不明の点が多い。これに対し浅田藩青木氏は大名になつたこと、江戶幕府が調査刊行した大名の出足等を綿密に記録しており、その足跡をたどるとうそれで貴重な資料となつていふ。その資料から摂津・浅田藩青木氏は秩父基房数代後の青木重直の時、突如この名が歴史に登場、厳しい時代を反映、苦難の道程を余儀なくされますが、その足跡は次のようになります。(以下、浅田藩青木氏十七代当主・青木淳一氏提供の著書「摂津麻田藩」等の資料による)

……丹治・青木重直・美濃に住し土岐氏に仕え、土岐氏衰退により齊藤道三(美濃のマムシと称されていた)に仕えた。道三死後、道三の娘婿織田信長に仕えたが、信長本能寺に倒れたため、豊臣秀吉に仕え、重直八十六歳で大坂で没す。嫡男青木一重(浅田藩青木氏の祖)は始め今川氏に仕え、後秀吉・真田に仕えては婿成貞田軍とともに豊臣思願として、徳川軍と戦い、徳川軍を苦しめ、徳川に仕え、大坂城の外堀を埋めることを条件に和睦、戦いを終える。秀頼は和議答礼使として大蔵局正宗尼を駿府城に向かわせながら、この副使格として青木一重を随行させる。家康との会見後、正宗尼は土産付きですぐに帰されたものの、一重だけは拘束状態となり帰されず、やがて夏の陣が始まつてしまつた。一重不在の大坂城は幸村一人に頼るありさまとなり落城、豊臣氏は滅亡する。一重は剃髪、死を覚悟する。すると家康、一重に「麻田藩一万石を与えるので徳川に仕えよ」と促す。その際家康は「石高は一万石ながら格式一万石をもつて遇す」との墨付きを与えたという。こうして丹治・青木氏は麻田藩一万三千石大名として明治維新まで十五代にわたつて存続。維新後は華族(子爵)……

以上が丹治麻田藩青木氏の足跡となつていふ。

【丹党 呼称考察】

私は長年、武蔵七党のうち県西部を地盤としていた「丹党」の呼称に

ついて「なぜ丹党なのか」と何か馴染めないものがありました。他の武蔵武士団との違いが気になつてきたからです。

たとえば児玉党は児玉郡を本拠としていたし、村山党は村山、所沢、狭山周辺に根をはつていた。横山党は南多摩郡八王子の横山庄を本拠とし、猪俣党は児玉郡猪俣村(美里市)が拠点。野与党は埼玉郡野与(のい)西方、日野や日立付近を本拠としている。騎西党は熊谷や騎西を中心にした武士団で、いずれも地元地名をもつて党名としていました。ところが飯能など八高線沿線に根を張つていた丹党だけは、地元で丹郡や丹郷という地名があるわけでもないのに「丹」を名乗つていました。この妙な名に疑問をさへ感じていました。もし「奥武蔵党」とでも称していれば、うまいですね、親しみも湧く。が、なぜ丹なんだと思ふに思つてはいたものの疑問を解く方法もなく、年月が過ぎてしまいました。

「丹党」語源については、これもいろいろ説がありました。「誕生した皇子の産湯に多治比の花びらが浮き、その名が与えられた」とか「植物タジヒは別名タジジとも称される」とするものもあり、「多治比から丹治となり丹となる」とする著書にも出会つた。丹党諸族の守り神「丹生明神」とよぶとの説もある。こうした諸説、むろん有り得ないことではない。が、そこに何か神話的な匂い、コジツケ的な匂いを感じられ

て仕方なかったのです。語源説明をあきらめていた、そんな時、丹治丹党系青木氏の末裔とされる青木八郎さん宅で『青木家譜』を見せました。その一節を見てハッとしました。目からウロコが落ちる思いだったのです。たった一行でしたが、こう書かれていたのです。

……氏祖武石磨呂は丹波に領を与えられ丹を称し坂東に下向後も丹を称す……

これだ！、ハタと膝を打ちました。丹波は京都から岐阜にまたがる地域の地名であり、朝廷との関係が最も強い地域。しかも丹治丹党の始祖が皇族であった点や地名をもって姓とする当時の習慣からみて、他の諸説よりはるかに高い妥当性が感じられたのです。「丹党」の語源、果たして何が正解なのか、今後、歴史研究家によって解明されるよう期待してやみません。

(副会長)

日光山と周辺の見学会

大野邦弘

平成22年の見学会は、8月26日(木)栃木県日光市の日光山への研修となりました。日光山の境内に飯能出身の中山信吉公の墓石が存在するとの本会理事浅見賢治氏の情報により今回訪れることになりました。

飯能駅南口七時集合し、会員26名

はマイクロバスに乗車一路日光へと向かいました。

日光と言えな、だれも知らない人はいない有名な一大聖地です。東照宮、二荒山神社、輪王寺の二社一寺を中心とした地ですが、その周辺には、日光開山からの特別な信仰の歴史の遺構が多く残されています。

最初に、日光山信仰の概要を記します。

日光山は、男体山、女峰山、太郎山の三山を中心とする山岳の総称で、奈良時代末の天平神護二年(七六六)勝道上人の開山とされ、四本龍寺を建立したのが始まりとされています。弘元元年(八一〇)には、寺号を満願寺と改め、空海、円仁の來山を伝えていきます。

鎌倉時代には、將軍家の帰依が篤く、男体山、女峰山、太郎山の三山を三仏(千手観音、阿弥陀如来、馬頭観音)に比定し、日光三所権現として、今日でも三仏堂の本尊として祀られています。

室町時代あたりから、修験道が盛んになり、真言、天台の両派が合同して修行しておりました。

江戸時代には、天海大僧正(慈眼大師)が貫主となり、山王一実神道の教えにより、徳川家康を東照大権現として、日光山に迎え祀り、輪王寺の寺号が勧許され、徳川家康、家光を祭祀する聖地となりました。

明治の神仏分離により、東照宮、二荒山神社、輪王寺の二社一寺に分割され、その折、山内の堂宇や塔が移築されたものもあります。

さて、当日は、十時十分頃日光に到着し最速見学に入りました。



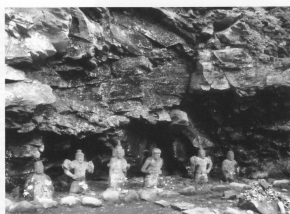
①

①日光発祥の地、四本龍寺観音堂に参拜、隣は東照宮地から移築された三重塔があり、その間には、珍しい石造の護摩壇が残されています。バスにもどる途中とされる小玉堂へ寄り、仏岩へと向います。

②仏岩の前には、日光開山の勝道上人の墓と開山堂(勝道上人は、仏岩の上方で荼毘にふされ、埋葬されたが、東照宮鎮座の傍り、この地に開山堂が建てられ、遺骨も開山堂裏に移された)。その奥の仏岩のくぼみに立つ石造六部天を見学しました。

③車で日光東照宮を創建した天海大僧正の廟慈眼堂へ向います。堂の裏には石造六部天に囲まれた中に建つ天海大僧正の巨大な五輪塔があります。

④昼食は、日光名物のゆば定食を賞味し、徒歩で、二荒山神社前から東照宮前に出る三仏堂あたりを見学、再びバスで「憾満が淵」へ向いました。



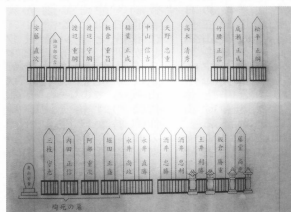
②



③



⑥



⑤男体山からの噴出した溶岩によってできた奇勝で、古くから不動明王が現われる霊地といわれ、川の急流が不動明王の真言を唱えるように響くので、晃海僧正が、真言の最後の句「カンマン」をとり名付けたといえます。

⑥今回の一番の目的である釈迦堂へと向います。東照宮西側で訪れる人もない場所ではありますが、ここに飯能ゆかりの中山信吉公の墓石があります。釈迦堂西には、徳川三代将軍家光公の死に殉じた江戸の五名忠臣と、徳川譜代家臣十九名の墓で、高さ三メートルほどの大きなもので、この墓石は、二列に整然と並べられており、譜代家臣十九名の墓石

の中には後列中心に中山信吉公の墓石がありました。碑の裏に書かれた文字です。

安永七年
中山備前守丹党信吉
四月十七日

飯能出身の信吉公の偉大さに参加者は胸うたれていました。今回は、日光山境内のあまり訪れたことのない見学場所でしたが、建物や石塔等、日光の古い歴史にふれることができたと感っています。すべて予定通り見学することができ、飯能へ午後七時頃帰着しました。(副会長)

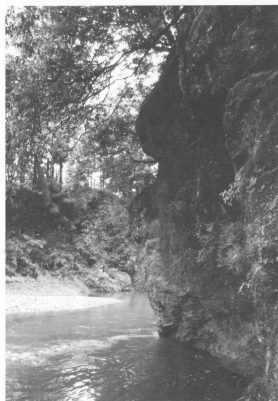
岩井堂 余談

関根貴志

岩淵の岩井堂観音は入子助蔵氏の研究や地元の方の熱意により、近年関心を広く集めているが、私は観音様の事とは別にこの岩井堂周辺の土地自体にも大きな魅力を感じており、少し別の側面から注目してみたいと思う。

○竜宮淵

岩井堂眼下の成木川の淵に、竜宮への入り口があるという。そんな言い伝えが明治初期に編纂された地誌に記載されており、意識して引いてみる。(『南高麗郷土史資料集・一 地誌・村誌』平成9年復刻版を参照)



岩井堂直下

○淵
竜宮淵というものがある。場所は、村の西方の小字前箇貫の、岩井堂の岩の下で、上流側になる。底が深く測ることができない。
土地の者の言い伝えでは、享和年間(1801-1803)に築地武助という村人が居て、水泳が大変上手で水虎と呼ばれるほどであった。あるとき底を測ろうとして水中に潜って見ると、東のほうにひとつの洞窟があった。奥行きがどのくらいあるのか調べようとしたが、水が非常に冷たくて耐えられないほどであった。三間ほどの竹竿を持ってきて探ってみると、奥までは届かない。土地の者は、この洞窟は竜宮界に通じていると考え、竜宮淵と呼んだ。

この淵は岩井堂の直下ではなくもう少し上流側の別のどこかかもしれない。

ないが、奥深いというだけで竜宮に通じているという発想は唐突なので、他に書かれていない由来や逸話があるのかも知れない。(浅草寺の山号も「金龍山」だが関連はわからない)

○竜宮ヶ沢

岩山の脇を流れる竜宮ヶ沢は、そもそもこの地に観音像が安置された契機となった場所であり(岩井堂観音略縁起には「一人の旅僧竜宮ヶ沢に霊跡奇瑞を感得する像を安置せしと傳う」と書かれている)、件の観音像には「龍間沢」の銘があったと言われる。

流浪の僧が旅をやめ、観音像を奉るだけの何かがこの竜宮ヶ沢にあったというところで、そういった意味では現在堂宇のある岩山よりも興味深い。先に引いた地誌には次のような記載がある。

○竜宮ヶ沢

村の南西方面、前箇貫岩井堂の入り。多摩郡高麗郡両郡の境の谷間にひとつの洞穴あり。その洞穴より湧出するなり。往古から、土地の者の言い伝えて地名を竜宮ヶ沢と呼ぶと云う。

谷間に一つの洞窟があり、そこから水が湧き出しているのだという。先の竜宮伝説との関連は不明だが、霊験を感じたのであればその洞窟に秘密があるのかも知れない。で、こちらは先に紹介した淵とでは遠い地上

にあるので、ある晩冬の時に沢を訪れてみた。

峠道から沢の左岸に沿って山道に入り、通っていくと古い倒木が幾つも倒れており、それをくぐりながら進んでいく。付近には岩石はあまり見られないが、河床には丸石がごろごろしている、以前はもっと水量が豊かだったのかも知れない。しばらく登ると、丸石が幾つも重なり合ったところから水がしみ出すように湧き出ている。水源が洞窟でないことは分かったが、地誌がわざわざ嘘を伝えたとも考えにくい。洞窟は倒壊でもして無くなってしまったのか、あるいはもって登った先にあるのか、少なくとも今回は自分に霊験は顕われなかった。とはいえこの地にはまだまだ埋もれている逸話があるように見える。徐々に探っていければと思う。

(会員)



竜宮ヶ沢

《随筆》

ゴマをよなげる

小沢和子

七月に入り夏も本番。キンキンに冷えた冷汁が食べたくなった。キュウリは採れ始めたし、ゴマは毎年作っているので大量にある。

ところが、保存してある缶を覗いてみると、よなげ済みのゴマが全く無い。つまりすぐに使えるゴマがないのだ。一見するときれいだがか細いゴミや茶色のしんなりしたものが細かく、底の方には砂や土も入っているのがわかる。

収穫の後には、ゴマだけが落ちる細かい網目のふるいを使ってゴミを取り除いている。しかしゴマと一緒にすり抜け落ちる、ゴマよりも小さい不純物がまだたくさん入っている。最終作業の「よなげ」をしなないとゴマは食べられないのだ。

わざわざゴマを買ってくるのも残念なので、お天気もいいことだし、思いきってよなげことにした。まず、我が家でいちばん大きい直径35センチのボールに水をたっぷり入れ、その中にゴマをあげた。実のしっかりをしたゴマは、すぐに底に沈んでいく。そこで初めて水面に沈んだ不純物を取り除き、ボールの中の水を静かにこぼす。また水を張り、同じ作業を繰り返す。五、六回ほど繰り返すとだいぶきれいになる。さて、こ

れからが本番だ。

沈んでいるゴマを浮き上げらせすくい取るのだ。ボールの中の水を静かに静かにかき混ぜ渦を起す。すると底に沈んでいたゴマがまるで竜巻のようにぐるぐる回りながら浮き上がってくる。すかさずおたまですくまで繰り返す。

十時過ぎに思い立った「よなげ」は十二時を回ってしまい、昼食の冷汁は諦めた。ゴマは収穫してから食べるまでにはかなりのめんどうで、特に「よなげ」は根気のいる作業だ。

「ゴマをよなげる」とは、子供の頃から聞いていた言葉だったので、普通に使っていた。が、さて「よなげる」とはどんな意味があるのだろうか。ゴマ以外でも使うことはあるのだろうか。方言なのだろうかともすまじ疑問になった。

広辞苑を引いた。「よなげる」があった。よなげる「1、米を水に入れ入れ磨く。2、細かい物などを水に入れて濁り分ける。3、選り分けて悪いものを捨てる。淘汰する」とあった。まさにゴマの仕上げそのものだ。

「よなげる」とは、純粹にゴマを取り出すための、先人のすばらしい知恵だと感心した。

ゴマが干しあがったら、セサミンいっぱい夏の味の冷汁を作ろう。

(会員)



原町山車人形「神武天皇」は明治25年(1892)に名工三代原秀月により作成された優れた作品である。作者の三代原秀月は幕末から明治にかけて活躍した人形師で雛人形や山車人形の名品を数多く残している。

人形は神武東征神話での勇姿を表している。頭は玉眼で、獣毛製の髪と髭が植えられている。とびは木製で金箔が施されている。手足は胴体へのはめ込み式で、胸部上には豪華な衣装が施されている。

(平成23年3月23日市指定)

飯能郷土史研究会の活動

◎平成22年度事業報告
▽総会 4月17日(土)
講演会

○講話「岩殿観音靈驗記」

(田辺述) 嘉津山鶴義氏
飯能にもあった名工宮龜年の筆塚

講師 嘉津山清氏
▽例会
協合理事)

■6月19日(土)

「古代高麗郡における仏教の受容」

講師 須田 勉氏
■8月26日(木)

(国土館大学教授・会員)
見学会「日光山と周辺の見学会」

案内 大野邦弘氏
(副会長)

■10月

「考古学からみた飯能」

郷土館事業に協賛
■12月18日(土)

私が体験した「昭和初期の大恐慌と飯能市街地の経済界」

講師 加藤義雄氏
(理事)

■平成23年2月19日(土)
飯能の丹党武士「青木氏とその周辺」

講師 吉田 靖氏
(副会長)

■3月31日

郷土はんのう31号発行

◎平成23年度事業計画
▽総会 4月16日(土)

講演会「飯能の石塔についてー調査成果からー」

講師 村上達哉氏
(郷土館学芸員)

▽例会

■6月18日(土)

「祭りの笛」
講師 石森裕也氏
(東京藝術大学在学中)

久下文男氏
(理事)

■8月
バス見学会 群馬方面

■10月
「祭祀「飯能戦争」

郷土館事業に協賛
■12月17日(土)

「武蔵野鉄道」
講師 浅見徳男氏
(理事)

■平成24年2月18日(土)

「やさしい仏像の見方」
講師 坂口和子氏
(会長・日本石仏協会会長)

■3月31日

郷土はんのう32号発行
新会員 加藤勝造(久須美)

柳戸 一(双柳)
沼部真也(中山)

編集後記

郷土はんのう31号の編集作業をしていた3月11日午後、東北・関東大震災という未曾有の事態が発生しました。その後の歴然たる報道、無残な被災地と住民の苦難を目のあたりおとし、どなたも落ち着かない日をお過ごしだったと思います。友好都市として結ばれた茨城県高萩市も被害が発生。早速当市も救援にかけつけました。被災地の方々に心からお見舞い申しあげ、一日も早い復興をお祈りいたします。

31号もふるさと飯能の貴重な証言として各氏にご寄稿いただきました。皆様の更なるご活躍とご協力をお願い申しあげます。

(坂口和子)

ご寄贈ありがとうございました。

苗字から引く家紋の事典

(東京堂出版H23)

高澤 等著(日本家紋研究会会長・

会員)

郷土はんのう 第三十一号

発行日

平成二十三年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会

〒357-0121 飯能市中藤上郷四一三

電話九九七七一〇六五四

題字 大野邦弘

印刷所 (有)ヒイ・ユースフル